

人工林の恒続林誘導における更新木のニホンジカ食害防止調査（R4～6）

青山祐輔・小島 靖

1. はじめに

奈良県では、森林環境の維持向上のために、混交林誘導整備事業により、手入れの遅れた人工林の恒続林化を進めている。スギ・ヒノキの針葉樹林で群状択伐を行い、広葉樹等の苗木（更新木）を植栽し、混交林へ誘導するにあたり、ニホンジカによる更新木の食害が大きな阻害要因となっている。更新木のニホンジカ防除方法は多数（防護柵、単木保護資材、忌避剤等）存在する。一方、地域によってニホンジカの生息密度が異なり、採食圧の強度（食害の受けやすさ）によって適切な防除方法は異なる。

そこで本調査では、①ニホンジカの採食圧の強度を予測する簡易な判別方法の開発 ②ニホンジカの採食圧に応じた適切な防除方法の検証 ③ニホンジカの採食圧の判別方法とそれに応じた適切な防除方法について技術指針にまとめることを目的とする。令和4年度は整備前事業地におけるニホンジカの生息密度調査および下層植生調査を実施した。

2. 材料と方法

4ヶ所の整備前事業地（宇陀市、明日香村、黒滝村、十津川村）に2m×2mの調査区を15～30区画設定し、糞粒法によりニホンジカ生息密度を推定した。また自動撮影カメラを3～4台設置し、ニホンジカの撮影頻度指数を調べた。

2m×2mの調査区を設定し、下層植生の被度（地面が下層植生に覆われている面積の割合）を目測で算出した。また、植生の種構成とニホンジカによる食痕の有無を調べた。

3. 結果と考察

糞粒法調査および自動撮影カメラ調査の結果を表1に示す。明日香村の事業地は自動撮影カメラではニホンジカが撮影されたが、糞粒法では糞は発見されず、ニホンジカを検出できなかった。

下層植生調査の結果を表2に示す。宇陀市では15区画、明日香村では24区画、黒滝村および十津川村では30区画の調査区を設定した。被度が50%を超える調査区は、宇陀市ではアセビ、シキミ、シダが、明日香村ではシダ、アオキが、十津川村ではシキミ、コアジサイが優占していた。黒滝村では被度が20%を超える調査区はなかった。アオキやコアジサイには食痕が見られ、ニホンジカの採食圧は強いと考えられた。

今後は、整備後事業地において更新木の被害調査と防除資材の効果調査を行う。

表1. ニホンジカの生息密度および撮影頻度指数

整備前事業地	調査区数	生息密度(頭/km ²)	カメラ台数	撮影頻度指数(頭/100カメラ日)
宇陀市	15	20.8	3	9.4
明日香村	24	0	3	10.6
黒滝村	30	11.2	4	17.4
十津川村	30	1.0	3	5.2

表2. 下層植生の被度についての調査区数の度数分布表(区画)

被度(%)	宇陀市	明日香村	黒滝村	十津川村
0-1	1	2	18	8
1-10	8	9	10	14
11-20	2	1	2	1
21-50	2	6	0	4
51-100	2	6	0	3
合計	15	24	30	30